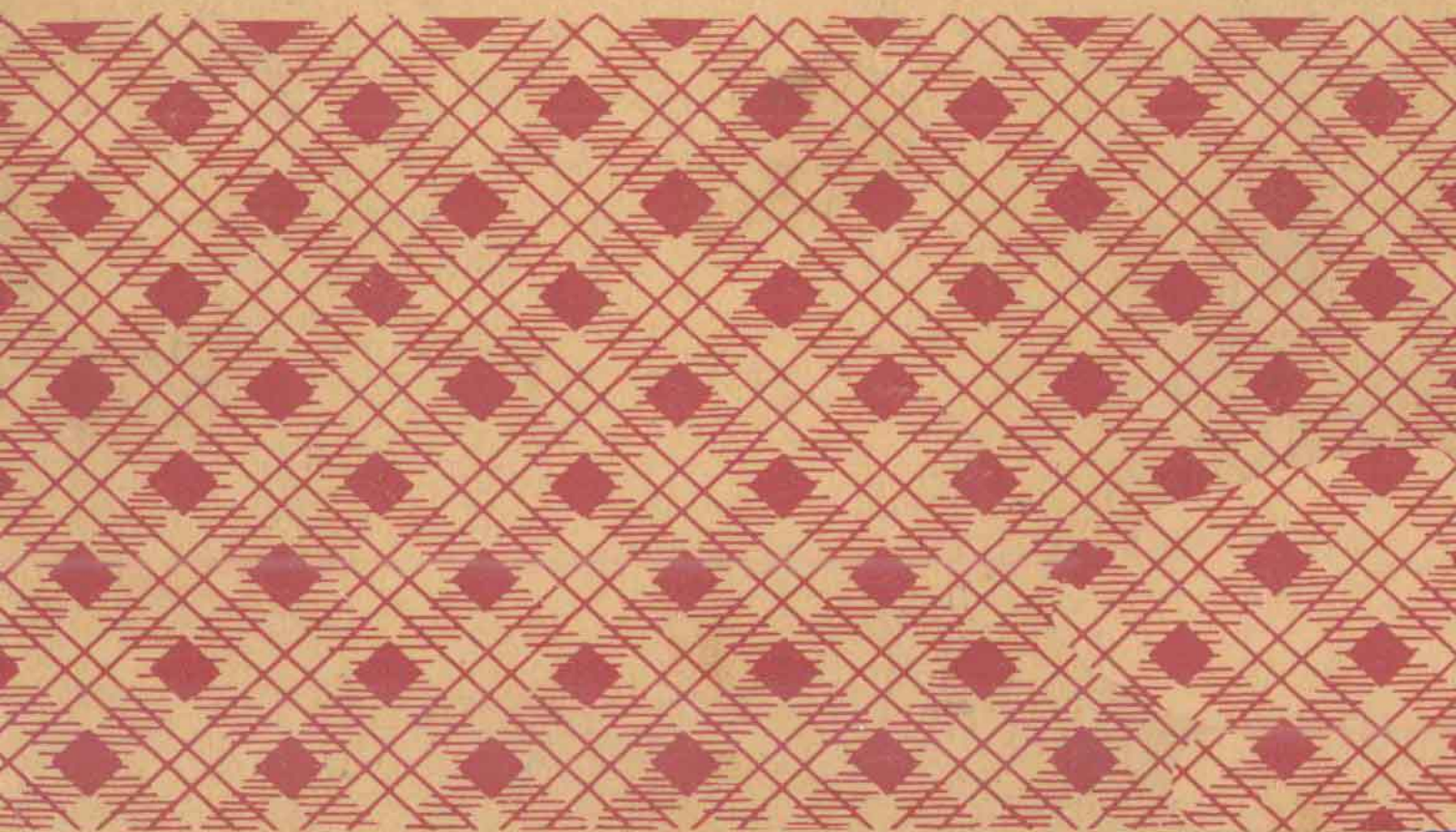


われら劣等生

赤松光夫



*AKIMOTO BUNKO

秋元文庫

われら劣等生

昭和49年7月31日発行



定価はカバーに表示してあります。

■著者紹介

赤松光夫

(あかまつみつお)

昭和6年徳島県生まれ

京都大学文学部卒業

主なる作品

「三等高校生」

「初恋実験中」

「ミステーク時代」

「まあ失礼ね」

「ハートでアタック」

他多数

現住所

東京都狛江市和泉763

著者 ■ 赤松光夫

発行者 ■ 秋元英子

発行所 ■ 株式会社 秋元書房

〒162 東京都新宿区赤城下町42
電話 東京(268)0758(代)
振替 東京 27047

乱丁、落丁本はお取替えいたします。

組版=西田整版

印刷=皆川印刷

製本=大和製本

© MITSUO AKAMATSU 1974

0193-B023-0029

秋元文庫

われら劣等生

赤松光夫著



秋元書房

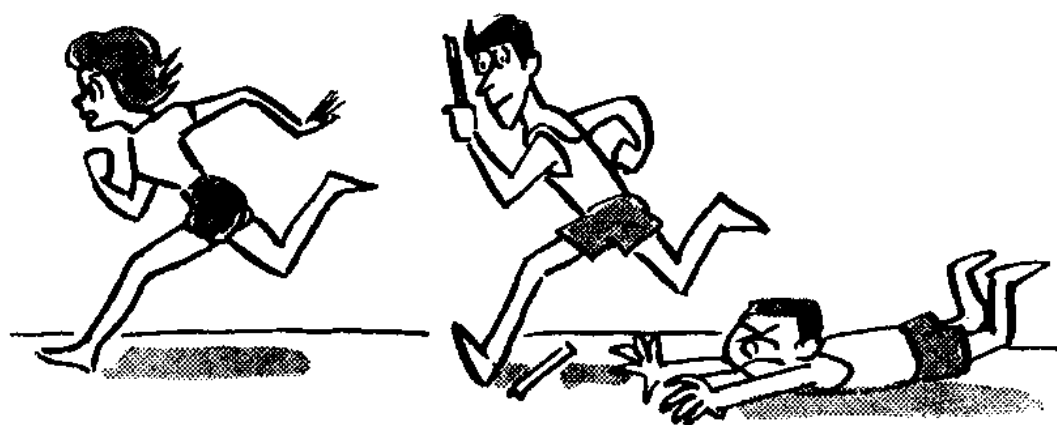
日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

コーヒーただ飲み事件	7
劣等生と東大生	25
インチキガイド本日開業	39
とんだ小暴力	60
チンドン屋計画	76
変な外人	100
おせっかいはやくべし	117
勇気リンリン	135
日米劣等生大会	148
小さいいじわる運動	171



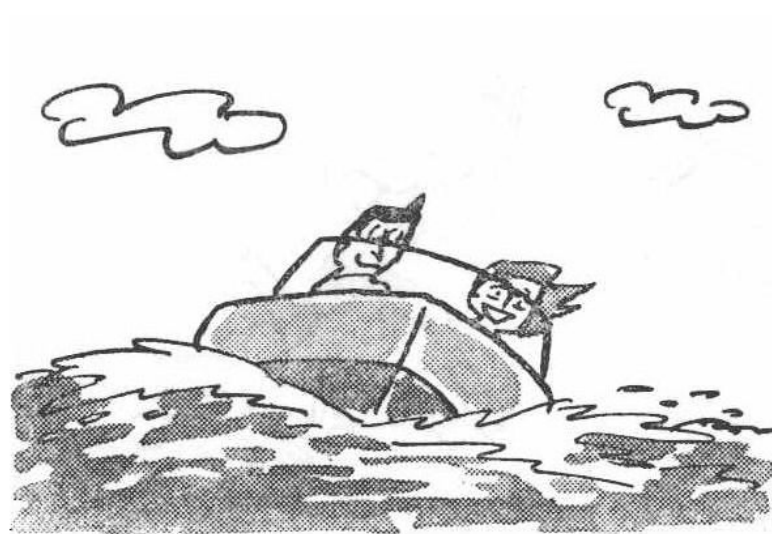
兄さんのオキユー

カバー・さし絵

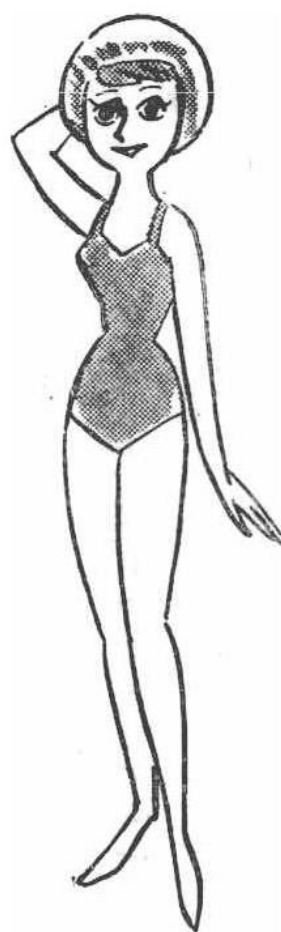
杉山

卓

183



われら劣等生



主要人物

桂木奈美——クラスの秀才で、美人の高校生。その彼女が何の目的からか、毎週土曜日になると、“シンデレラ”という喫茶店に行くという。

夏木二郎——奈美と同じ富士高校に通っている。勉強はともかく、頭の回転と悪知恵は、人一倍働らくという劣等生。

植村 光——東大の三年生。二週間に一度ぐらいの割で、富士山のふところにあるこの町に帰ってくる。

塚田文夫——富士高校三年。ボクシング部に入っているが、見かけほど強くない。

浦川万助——塚田の子分。塚田同様、親のスネをかじっている劣等生。

ベッシーとキャロル——ふたごのアメリカ娘。夏木二郎のためにとんでもない目にあわされる。

コーヒーただ飲み事件

1

桂木奈美^{かつらぎ なみ}は、さつきからじつと駅前の喫茶店「シンデレラ」で、アイスコーヒーをストローでちびちび飲みながら、もの想いにふけていた。

奈美は、夢多い高校二年生である。この町の富士高校に通っている。たいていは土曜日であるが、一週間に一度、奈美は、通学電車を待つ間、こうして、「シンデレラ」でお茶を飲む。広くもないし、狭くもない。いくらかうす暗くて、空想するのには、もってこいの場所だからである。それから、もう一つ理由がある。それは、彼女の心を魅^ひく、東大生が、土曜日の午後には、よくこの喫茶店に立ち寄ることが多かったからである。

でも、奈美は、まだ名前も知らず一度も植村光^{うえむら ひかる}というその大学生と口をきいたことはない。だが、植村が、喫茶店にふいに入ってきたり、うす暗がりの中に彼の姿を見かけたりすると、思わず奈美はドキドキしてしまう。でも、それが、なにかひどく冒険でもしているようで楽しいのだった。

彼の姿が見えない時には、奈美は翌日の日曜までなんとなく暗い気持ちになる。

植村光は東大の三年生。この町は、東京から電車で三時間あまり、富士山のふところにある。

植村光は、二週間か三週間おきの土曜日に帰ってくるのだ。

だから、奈美が、こうして毎土曜日、彼を待っていても、確実に会えるとはかぎらない。彼女は、できるだけ、窓ぎわの明るい場所で文学全集などをひろげて読んでいることが多かった。

駅前の喫茶店だけに、時々学校の生徒もくる。しかし、こういう喫茶店に入るとは、学校の教師に見つかるに注意されるから、高校生は、あまりやってこない。

それに、奈美は、ほかの生徒に見つからない時間を知っていた。それは、三時から四時頃の間である。

土曜日は、クラブ活動で居残る生徒以外は、二時がくるともうすっかり学校には生徒の影がなくなる。

奈美は土曜日にかぎって、図書室で時間をつぶしてから帰るのだ。その時刻が、またどういうわけか、一番植村光に会うことの多い時刻であった。

植村光は、東京で下宿しているが、おそらく新宿を十二時頃に出る電車に乗るのであろう。

しかし、どう考えても、どうして植村光が、町に帰ってくるたびに、“シンデレラ”に立ち寄るのかは、全然彼女にも見当がつかなかった。

最初は、この喫茶店に好きな女の子でもいるのではないかと考えたが、そのようすもない。植村光は、いくらか黒いが、きりっとひきしまった顔を、伏せかげんにして、もの思いに沈んでいるときは、すばらしかった。きゅっと結んだ口もと、いくらか頬のそげた感じは、男性的である。

奈美は、どちらかというところ、色は白く、中肉中背で、きゃしゃな感じであった。

彼女の家が、町の「芙蓉」という旅館兼営の料亭であったせいかもしれない。それでいて、奈美は、いくら文学少女で、内気な性格であった。

奈美が、植村光をこの店で見かけるようになったのは、まったくの偶然である。奈美には両親がいっしょにいない。母親は、彼女が、まだ赤ん坊の時に亡くなって、東京には父親がいる。A電機の課長だが、新しい奥さんをもらったから、奈美は、おばあさんの所にあずけられたのだ。そんなせいも、ふと気が沈むことがあって、自分一人の時間を得たいばかりに喫茶店にくるようになったのだ。そして、たまたま、植村光を発見した。それが、土曜日だとわかるようになる。と、今度は、いつか、奈美の方が、その日を心待ちするようになっていた。

すでに四時を過ぎている。奈美は、腕時計を眺めながら、ふっとため息をついた。どうも植村が姿を現わしそうになかったからだ。でも、彼女の計算でいくと、先々週から、植村は姿を現わさなかったから、今日は、必ず姿を現わすような予感があった。もう少し待ってみよう。奈美は、そう思った。

その時、店の一枚ガラスのドアを開けてどやどやと人が入ってきた。

期待に胸をおどらせて、その方をみた奈美ははっとした。

富士高校の運動部の男生徒たちであったからだ。

へまずい人たちだわ

奈美は、思わず、顔をかくそうとした。

幸い彼らは、奈美には気づかず、なにか興奮した声をあげながら二階へ上がってゆく。

その五人づれは、富士高校でも札つきの不良グループである。

三人は三年生、あとの二人は二年生で、三人の三年生の中には、柔道部の伊藤義太とボクシング部の塚田文夫がおり、二年生の中には夏木二郎がいた。あとの三年生一人と二年生の一人は、オッチョコチョイの木村というのと浦川万助という生徒である。

それをしおに奈美は立とうとした。だが、今日はたしかにあの大学生がくる日だと思うと、心残りがして、なかなか立てない。

突然、二階の方で、なにか、ののしり合う激しい声がして、どやどやと階段の方に、さっきの男生徒たちの姿が見えた。

「文句あんのか、文句が——、外へ出る、外へ！」

そう叫んでいるのは、二年生の浦川というオッチョコチョイである。

「ああ、いいとも、出てやるよ。いつだって相手になってやるよ」

そう言って、ズボンのポケットに手を入れ、三年生の大男たちを見上げているのは、夏木二郎であった。

夏木二郎は、東京からこの春転校して来た生徒である。どこか、あの大学生に似た顔つきだったが、彼より色が白くどこかにすさんだものがあつた。クラスは奈美と同じである。医者の子で、父親が、町の県立病院の院長として東京から赴任して来たのが転校の理由であつた。

彼は、英語と国語、文科関係の勉強がすぐできるのに、数学や理科が全然駄目だというムラのある生徒であつた。だが、頭はいい。クラスでも、常に三、四番の成績である奈美でさえ、そう思っていた。



「風来坊野郎のくせに！ 生意気やぞ！ よう思い知らせてやるぜ」

ボクシング部の塚田が、眉毛のうすいかつい顔をねじまげていった。

夏木のニヒリスチックな顔がかすかにゆがんで、微笑をたたえている。

どうも、この夏木に不良グループが呼び出しをかけ、こんな所につれこんだらしい。

「喧嘩するなら、外でやってくだされや、店の中でやられちゃめいわくですからな」

この喫茶店の店主が、おろおろしているウェイトレスにかわっていった。

「わかっているぜ。だから外へ引っ張り出してんだ。さあ湖の原っぱへいこう」

小男のくせに、ひどく手の早い浦川がいった。

「いきやいいんだろう。いきや——」

夏木は、足早に階段を降りてくると、自分からまっ先に肩でドアを開けると外にでていった。浦川や塚田、あとのとりまき連中は、そのあとにぞろぞろくつついた。

「あの、おかんじょうは？」

この時、初めてウェイトレスがいった。

「かんじょう？ まあ待て、今はそれどころじゃねえんだ。オオ、すぐ帰ってくるからなあ」

浦川がいった。

その時である。ドアから一步出るやいなや、夏木は、大通りを湖のある方向に全力で走り出した。

「それ、逃がすな！」

同時に塚田を中心に浦川たちが追いかけていった。

彼らは、それきり帰ってこなかったのだ。

「畜生!! ありゃ、どこの高校生だ。コーヒーを飲み逃げしたのじゃなからうかなあ……」
店の主人が、ウェイトレスをつかまえブツブツいつている。

この時、奈美は初めて、彼ら不良グループは、喧嘩にかこつけて、コーヒー代、七百五十円を踏み倒して逃げたのではなからうかと考えた。しかし、本当に喧嘩をしているのかもしれない。

奈美は、席を立った。やっぱりあの大学生は現われなかった。

彼女は、ガッカリして駅の方に歩きながら、ふと足をとめた。なんとなくこのまま帰るのがつまらなく、ちょっと小耳にはさんだ湖の原っぱという言葉进行を思ひだし、彼らが本当に喧嘩をしているのか、どうか、たしかめにいつてみたくなった。

実をいうと、そんな無駄な時間をついやしていると、バツタリあの大学生に出会うかもしれないという気持ちで働いていたのである。

この町は、人口三万ばかり、最近は、富士五湖めぐりの観光客が、めっきりふえて、町も美しくなった。

湖の青い湖面に富士の姿が浮かんでいるのを見てみると胸の中までが、コバルト色にそまりそうである。

湖の原っぱというのは、大通りをわずかばかり入った所にあるキャンプ地の草原のことに違いなかった。

だから、奈美は、その方に歩いていった。五月の緑が一面に生い茂っている。しかし、冬のスケート、夏のキャンプでにぎわうこのあたりも、今の季節では、ひっそりしていた。

やっぱり、原っぱには、人影一つ見えなかった。奈美が、やっぱりと思うのにも、まったく根拠のないことではない。

彼女は、日頃、夏木二郎が、富士高校の不良グループと親しくしているのを知っていたからである。

奈美は引きかえした。

ボート乗場には、白い船体の遊覧船がつながれ、モーターボートが、浜に引き上げられていた。

「よう、桂木クンか——」

ふいに彼女の背後で、男の声がした。奈美はふりかえった。

夏木二郎が、青白い頬にうす笑いを浮かべポケットに手を入れて立っていた。

「よう、モーターボートに乗らねえか」

彼は、また不良っぽくいった。

夏木二郎は、別に喧嘩をしたようすもなくすがすがしい表情だった。

「だって、モーターボートってお金かかるでしょう」

「チャーターするんだ。二千円ぼっちいいだろ！」

彼は、そういった。ぜいたくなおぼっちゃんだ。

奈美は、ちょっとだまった。それから近づいてきた夏木二郎にいった。

「あんた、さっき喧嘩して逃げたんじゃないの。それなのに、こんな所でぶらぶらしていいの？」

彼女は、皮肉をいった。

「なんだって……」

急に夏木の顔色が変わった。

「どうしてそれを知ってるんだ……」

「一部始終見てたのよ」

「じゃ、喫茶店にいたのかい……」

「そうよ……」

奈美はいたずらっぽくうなずいた。

チョッと夏木は舌打ちした。

「あなたたち、コーヒー代は払ったの？」

夏木はだまって、顔をそむけた。それから夏木は、ポンと足もとの小石をけると、向うへ歩きかけた。なんとなくわびしい影が、彼の背中にあった。

「やあ、奈美さんじゃないか。あまりボーイフレンドをおこらせるもんじゃないよ」

船つき場前のビヤホールから、いくらか赤い顔をした紳士が出てくるなり、にこやかに奈美に話しかけた。

紳士といっても、三十あまり、奈美にとっては、おじさんのような青年である。

だが、昼間からビールを飲んでいるような男には、あまりろくな人間はいないのではなからう